木の目草の芽

2014年12月30日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込：047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便振替00180-4-710688
加入者名：川口章子

第１１３号
全国集会報告号①

〈目　次〉

P.1　自然保護全国集会報告　渡邉嘉也
P.3　会長挨拶　森　武昭
P.5　基調講演　井上恭介
P.11　國見利夫さんを偲ぶ　松本恒廣
P.12　活動記録

二〇一四年度

自然保護全国集会報告

自然保護全国集会実行委員長　渡邉　嘉也

二〇一四年度日本山岳会自然保護全国集会は11月22日(土)、全国16支部、72名の出席により、広島工業大学（鶴学園）広島校舎で開催されました。

本年の行事は、日本山岳協会、ＨＡＴ－Ｊとの協同開催による22日の夕食懇親会、翌23日からのアジア山岳連盟（ＵＡＡＡ）の記念行事（ＪＡＣ後援）への参加も予定され、国際的な集会となりました

● 支部報告

自然保護全国集会に先立ち、近藤雅幸委員長の開会の辞、兼森志郎広島支部長、山田和人理事の挨拶に引き続き、支部報告が行われました。

午前中は埼玉、千葉、東京多摩、越後、石川、信濃の各支部、昼食をはさんで午後は東海、京都・滋賀、関西、四国、福岡、東九州、北九州の各支部が資料やプロジェクターを使って発表を行い、最後に、広島支部が支部活動と「山の日」の取り組みについての報告を行いました。（各支部報告の詳細は「木の目草の芽」10月22日発行１１２号）

なお、宮城、静岡両支部の報告は、別途討論会で行うことになりました。

● 森武昭会長の挨拶

日頃の委員会活動への感謝の言葉に続き、「家族登山百名山」など山岳会でこそ出来ることや、「山の日」制定の理念の実行を呼びかけられました。

● 基調講演

日本放送協会報道局チーフ・プロデューサー井上恭介氏によって「里山が宝の山に変わる瞬間」というテーマで講演が行われました。木材資源を有効利用してエネルギー問題や今日我が国で噴出している課題の解決ができるのではないかという提案を、中国地方でおこなわれている実例を挙げてわかりやすく解説するものです。ユーモアを交えながらの軽妙な語り口についつい引き込まれてしまいました。講演後の質疑も活発で、とても有意義な時間となりました。

● 討論会

４つのテーマについて討論を行う予定でしたが時間が足りず、そのうちの2件について報告がされただけとなりました。

✧　宮城支部柴崎氏による「宮城県の山地及

び丘陵における放射線量測定結果」についての報告がありました。

✧ 静岡支部白鳥氏から「リニア中央新幹線工事に関する南アルプスの自然保護」に関して静岡県知事あてに申し入れ、「残土を大井川渓谷に投棄しないこと。大井川の水量の低下をさせないこと」を要望したことについて報告がありました。

井上恭介氏による基調講演

✧ 他に「トレイルランニング」と「入山料に係る法律」について討論をする予定でしたが時間の制約から出来ず、結局資料配布だけとなりました。

✧ 最後に成川隆顕氏より『山の日』制定に関して報告と今後の活動について話がありました。

UAAA総会記念行事（広島山岳平和祭）

11月23日（日）

平和記念公園での広島山岳平和祭参加

● 国際フォーラム

「登山と山岳自然保護」をテーマに海外からネパール、中華民国（台湾）、韓国、パキスタン、国内は、山岳団体自然環境連絡会の６団体（日本山岳会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳協会、東京都山岳連盟、山のエコー、HAT―J）が発表を行いました。発表は英語で行われ、JAC下野綾子委員はデータベース「写真が語る山の自然　―今・昔―」(Photo data base to recreate past mountain environments）を、渡邉委員は「オーバーユースよってもたらされる諸問題」(Various problems caused by trekkers）について発表を行っています。外国語での発表にもかかわらず参加者は２００人を数え、参加者の関心の深さが見て取れました。なお、フォーラムの発表は今後報告書にまとめられる予定です。

● UAAA創立20周年記念祝賀会

JACからは19名が出席

11月24日（日）

● 弥山（535m）ハイキング

広島県山岳連盟が広島駅弁㈱と共同開発した「山のおべんとう」を持ち、紅葉に彩られた世界遺産宮島厳島神社を参拝し、広島支部会員のガイドで弥山を登りました。（JAC10名が参加）。（広島支部　副支部長野島信隆氏の「宮島　厳島神社参拝＆弥山ハイキング」報告を「木の目草の芽」１１４号に掲載予定です）

終わりに

複数の団体による同時開催という難しい条件に各団体は苦労を余儀なくされました。中でも、運営の中心となって尽力された日本山岳会広島支部、広島県山岳連盟の方々には感謝の言葉もありません。お蔭様でアジアの山岳団体や日本を代表する団体の岳友との有益な集会を持てました。ありがとうございました。

会長挨拶

公益社団法人日本山岳会会長
森　武昭

皆さんこんにちは。

最初に、この全国自然保護集会に各地から多数ご参加いただきまして、本当にありがとうございます。特に、今回この開催を引き受けてくださいました広島支部の皆さん、そして本部の自然保護委員会の皆さんのご尽力に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

先程来、途中からお話をうかがったのですが、各支部が色々活発な活動をされているということを伺って、大変心強く思いました。ただ、今日もそうですけれども、この高齢化ということが（フロアーから笑い）、どうしても重くのしかかっているということは、どの会合に行ってもそうなのです。これは社会の仕組みそのものがそのような傾向にあるので、やむを得ないといえば、やむを得ないですが、組織としては、やはり若返りを図って、活性化を進めていかなくてはいけないということは、歴然たる事実だと思うのです。

ところで、今日来る時の新幹線の中で、どういう挨拶をしようかということを考えてきたのですけれども、残念ながら僕の前に、前垣さんがほとんど話されてしまったのです（フロアーから笑い）。僕は山の日の話をしようと思ってきたのに、ほとんど話されてしまったので、どうしようかなと思ったのですが、せっかく考えてきたから、ちょっと重複しますがご容赦ください。

その「山の日」のことですが、「祝日なんて法律を作るのはとても無理なんじゃないの？」「山の日というのを制定できればもう充分じゃないの？」と私は日頃言っていたのですが、今日お見えになっている成川さんたちが中心になって、祝日という事を実現してくれたわけです。

この「山の日」のパンフレットは、山の日協議会から出ているのですが、タイトルが良いのです。

「山に親しみ、山の恵みに感謝する」起草文でも良いことが書かれていますが、時間の関係でここでは読み上げません。

自然保護委員会は長い歴史を持っていて、環境破壊を防ぐなど色々なことを、かつて、また今日に至るまで脈々と活動を続けてきているわけですが、やはり高齢化ということも関係していて、運動を主体的に取り組める状況にはほとんど無いのではないかと推察しています。例えばシカの問題などは「難しい」、「大変だ」、ということは問題提起できますけれど、じゃあ日本山岳会の自然保護関係者で何ができるかというと、先程来、「せいぜいシカを一所懸命食べようぜ」と言うくらいしか

（「山の日」協議会パンフレットより）

（フロアーから笑い）、正直言って、できないというのが現実だと思うのです。

それを打開するために、是非、自然保護委員会の皆さんに今後検討していただきたいのは、（パンフレットを持ちながら）「山の日」のここに書いてあること、そのものがですね、これからの自然保護委員会の進むべき道を示唆しているのではないかと、そういうふうに私は思うのです。

それは、日本山岳会でも、この前の総会の後に、少し組織を手直しして、「山の日」が祝日に制定されたことを受けて、「山の日制定プロジェクトチーム」というのを発展的に解消し、「山の日事業委員会」というのを作ったわけです。それで、さきほど前垣さんが言われたような「なにか日本山岳会も、そこのところで他の団体等と協力し合ってやっていこうよ」というのが一つの柱になっています。

そしてもう一つは、支部の皆様のお蔭で、家族登山あるいは親子登山についても非常に良いホームページができています。それで私は先日、委員長の永田さんに、「家族登山百名山でもやれよ」と言ったのです。「それを各支部の協力のもとに、子供や孫を、山に引っ張って行ってよ」と。それがまさに、この山の日制定の理念と、まったく相通じる所があると思うのです。

そういう活動を通して、若い人が山に入り、日本山岳会にも入っていただく、ということが、今後日本山岳会の活性化に通じるのですね。まあ、若い人というと、二十代・三十代の方にもちろん入っていただきたいですし、さらに若い、一桁、あるいは十代の人が、そういう山に親しむ機会が多くならなければいけないと思うのです。

それで、自然保護委員会の皆様には、「山の日事業委員会」であるとか、「支部事業委員会」、あるいは「親子登山事業委員会」というのがございますので、そういう所と連携していただいて、さらに各支部とも連携して、活動を盛り上げて、若い人が山に入っていくような、そういう環境を作って行くということが、今後、自然保護委員会としての大きな役割になっていくというふうに私は思っています。今日お集まりの皆様、色々とご意見はあろうかと思いますけれども、このようなことを一つご検討いただければと思っております。すなわち、自然に親しむ中で、その保全・保護の重要性を認識してもらう啓蒙活動が、これからの自然保護活動の重要な役割になると考えています。

以上、開会にあたっての、私からのお願いでご挨拶とさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（記録：土井　充）

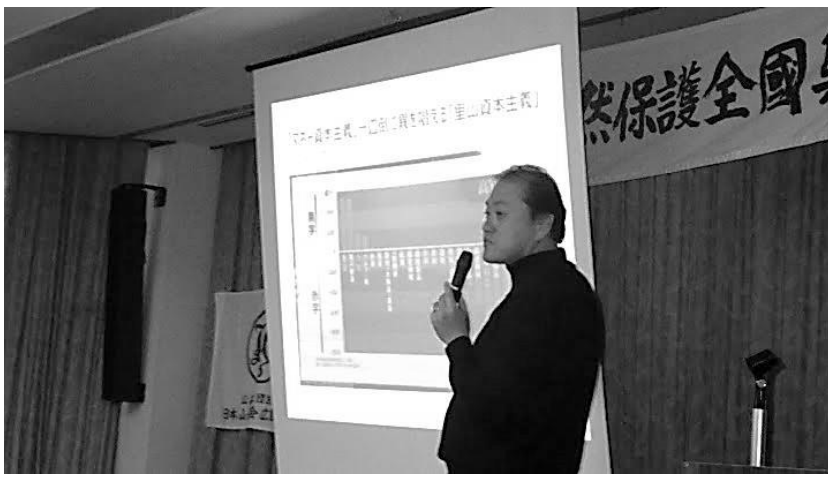
基調講演
『里山資本主義　里山が宝の山に変わる瞬間』

日本放送協会報道局チーフプロデューサー　井上　恭介

今日ここに寄せていただきましたのは、この夏まで３年間ＮＨＫ広島放送局に勤めていた時に前垣さんと知り合いになりまして、前垣さんは広島で美味しいお酒を造っていらっしゃるのですが、その美味しいお酒を造るには美味しい水が要り、その水を守るためには山の手入れをしないといけないというお話を伺って、おおいに共感したというのが始まりでございます。

今日のテーマは自然保護ですが、自然保護とか自然保全というのは２種類のものがあると思っています。ひとつは、ブナの原生林とかアマゾンの大密林とか、全く人が入らないことによってすばらしい環境になったものは、できるだけ人間の影響は排除する、という意味での自然保護があると思います。そして多くの方が、それ以外の山でも人が入らない方がいいと思っているのですが、全く逆の自然保護もあります。何千年もの間、人が入ってそこに手を加え、木を切ってはまた植えたり、その下に生えている山菜やキノコを採ったりしていたことで山の自然環境が保全されてきたという、いわゆる“里山”です。もちろん北アルプスや南アルプスなどへ行ってしまうと里山とは言えませんが、例えば南アルプスでも下の方にはけっこう里山があるのです。そして、そういった山がここ最近ものすごく荒れているのです。人が全く入らなくなるからです。それをなんとかしたいというみなさんの気持ちと、それから私の始めた里山資本主義では動機とか目的は違うのですが、結果としてはひとつになれるのだと思います。僕たちが言っている里山資本主義というのは、みなさんに、特に田舎の方には近くの山に入ってそこにあるものをどんどん活用していただくと、皆さんの生活が思った以上に豊かで楽しくなりますよ、という事ですから、やはりみなさんに山に入って頂きたいわけです。

カブトムシは最近デパートで買ってくるのですが、本当は山に居るのですよね。だから山の木でカブトムシをみつけたら子供たちは大喜びだと思うのです。そして



そのきっかけを作るのが山岳会であったり、『里山資本主義』のような本を読んでいただいた方だったりする。『里山資本主義』という本は、本人が一番びっくりしているのですが、今35万部売れていて、実は一番買っているのは都会の人です。満員電車に乗って毎日通勤するということも含めて、今までずっと続けてきた暮らしなり経済なりに、新しい考え方を取り入れてみたり、根本的に考え方を変えてみたりすることが必要なのではないかということなのだと思うのです。このように山に関係があったりなかったりしますが、里山資本主義とはどういうことなのかということをご紹介したいと思います。

里山資本主義の出発点は、広島に居りました時に、「田舎にいると職も無くてお金を稼ぐ手段が少なくてなかなか食べていけない。だからみんな東京に出て行ってしまう。それをなんとかしたい。」という、何十年も続いている過疎とか高齢化の問題を解決できないものか、本当に田舎は貧しいのかどうかを考えてみようではないかということからでした。そして、出発点に立つうえでひとつ調べたことがありました。それは都道府県ごとの、貿易収支のような数字になりますが、売る物が多くて買う物が少ない県は黒字になり、逆に売る物が少ししかなくて、買い入れているものばかりだとその県は食べて行けなくなるということになります。最も黒字なのは当然東京都なのですが、最も赤字の県は、この統計を取った年には高知県でした。その高知県がなぜ赤字なのかを更に調べてみると、多くお金を払っているのは、石油電気ガスといったエネルギーなのです。もちろん農業や漁業をやっていますから売っている物もあるわけです。でもよく見てみると飲食料品にもお金を使っているのです。つまり、生の物を売って、外で加工された物を買い戻しているわけです。高知県はこうして様々な物を買ってしまっているわけですが、実は高知県の山にはエネルギーの元はいっぱいあるはずなのです。

このような地方の赤字状態を解決するために、初めの第一歩を踏み出している方をご紹介したのが『里山資本主義』という番組の始まりでした。広島の庄原という山の中、限界化・高齢化している所の和田芳治さんが、“過疎を逆手に取る会”というのを30年近くやっていらっしゃいました。田舎にしかないもの、田舎の楽しみ方というのがあるのだということを言い続けて30年。その和田さんが最近になって、裏山の木をエネルギーとして使おうという運動を始めまして、週に1回、くべものを拾いに行くようになりました。そこで30分もすればスーパーのカゴがいっぱいになります。それを持って帰ってきてエコストーブに使う。興味のある方は是非和田さんの家に行ってエコストーブを作ってください。僕はこれを作りまして、今は世田谷区という東京の真ん中に住んでいるのですが、そこの駐車場で日曜日にご飯を炊いています。近くの羽根木公園で小学校2年生の息子と2人で同じようにスーパーのカゴを下げて歩くと、幸い競争相手もいませんから30分くらいで燃やすものがいっぱい取れるのです。和田さんの場合は、そんな羽根木公園ではなくて本当の山ですから、燃やすものなんかいっぱいあるわけです。そしてエコストーブはすごくエネルギー効率が良く、お釜で炊くのですからおいしいのです。

ここで彼が何を言いたいかということ

なのですが、田舎にいると収入が少ないから貧しい、食べていけないのだと、そんなことを言いながら裏山を全く活用しないで、エネルギー代全部お金で払っていますよねと。中国山地の山なんて本当に燃料の山で、たたら製鉄をやるために、山中の木を切って植えていたところですから、エネルギーは自給していたはずですが、戦後の高度経済成長の時代に電気やガスを使うようになって、山の奥までガソリンスタンドが出来るようになって、すべてのエネルギーにお金を払わないといけないという生活に置き換えてしまったわけです。でも全部お金を払って手に入れないといけないほど、忙しいわけでもないわけです。こうして毎日ご飯を炊いていると、和田さんの家の家計でいうと月に２０００円分くらいは浮くそうです。この２０００円を安いと思うか高いと思うかですが、少なくともその２０００円分は、どこか専門の業と言われるところで大量にエネルギーを作って供給してきたもので、我々は一方的に消費者になっているというのが今の資本主義だと思うのです。でも実は自分で手に入れられるものだってある。エネルギーは買うものだと頭の中に入ってしまっているのですが、本当にその常識は常識なのですかと考え直すことを、里山資本主義と呼んでいます。

和田さんは誰かが訪ねてくると必ず語るこんなエピソードがあります。ある時ちょうどご飯を炊いているところに友人がやってきて、「自分は家電量販店に行って薪のように炊ける炊飯ジャーというのを7万円出して買った。君は本当に薪で炊いているが食わせてみろ」と言うので食べさせたら、明らかにその炊飯ジャーよりもおいしかったので、悔しがりながらエコストーブをひとつ下げて帰ったそうです。今は確かにそういうことになっていると思いませんか。家電量販店に行くと、羽釜や土鍋のように炊ける、とか言っています。手も汚れる、手間もかかるようなことを、最先端の技術を使いながら、スイッチ一つでできるように置き換えたのですが、それがどんどん進化して行きつくところまで行き着くと、今度は昔のやり方を最先端技術で真似するということになっているわけです。

里山資本主義を実践している人たちの間ではこれを“なつかしい未来”と呼んでいます。未来というと僕ら世代でいうと鉄腕アトムとか金ぴかでメタリックな感じの、超高速鉄道とかいったものを言いましたが、資本主義・経済・科学技術というのは相当行き着くところまで来ています。僕たちがここからもう少し豊かな、もう少し洗練された生活を手に入れようとするなら、前の前の時代に僕たちが持っていた、なつかしい、でもあれがよかったよねという生活を見直すことなのです。

炊飯ジャーの周りでご飯が炊けるのを待っている子供はいませんが、僕らが毎週マンションの駐車場でエコストーブを使っていると、子どもがいっぱい集まってきます。自分もくべていいかって来くるから、火傷すんなよ、とか言いながらやっています。だから釜の蓋を開けたら皆で大歓声ですよ。釜で炊いたご飯も明らかにおいしいし皆で炊いた方が楽しかったりする。こうした“なつかしい未来”をこれからどうやって手に入れるかということも里山資本主義の提唱している事のひとつです。和田さんはエコストーブの講習会を自宅でもやっていますし出張して全国でもやってい

ます。そこで皆で実際にご飯を炊いてみて「これで皆さんはマネー資本主義の奴隷から解放されました！」と言ったりして、自立するための運動をされているのです。

エコストーブ　雑木５本でご飯１日分

和田さんの場合は月２０００円節約の世界ですが、もう少し本格的に、もっと山の木を使いましょうと取り組んでいるのが真庭市の製材会社の社長、中島浩一郎さんの、木くずを燃やす発電施設です。バブルが崩壊した後、この製材所も経営難になり取引している銀行の方に相談したら、設備投資をして生産量を増やしなさいとか、製品の種類を増やしなさいとか言われるわけです。でも中島さんは前々から、木くずをゴミだと言って捨てているのは本当にいいことなのかと思っていたものですから、銀行の方を説得して、10億円をかけてその発電施設を作りました。作ったら経営がいっぺんに良くなったというのです。なぜよくなるかと言いますと、丸太は製材すると半分くらいは木くずになってしまいます。その木くずをごみとして引き取ってもらおうとすると、産業廃棄物になって年に２億円くらいかかってしまうのです。でもそれが発電に使えるようになるわけです。製材所は電気をいっぱい使っていますから、年に１億円の電気代がかかっていましたが、発電所は夜も動いていますので、夜の分の電気を売ると５０００万円くらいの収入になるのだそうです。そうすると、製品がたくさん売れなくても儲かるようになってきます。この決断がなければ今の経営は絶対になかったと中島さんは言っていますが、現に全国で何軒も製材所は廃業しているという状況です。

更におがくずというのは発電しても使い切れないほど出てきますから、今度はそれを使ってペレットを作りまして、製材所の外の人に売ってエネルギーとして使ってもらうこともできます。中島さんたちがこういったことを初めてから、真庭市でも市の色々な施設のエネルギーをペレットに切り替えようという話になり、小学校のストーブとか温水プール、最近では真庭市の新支庁舎でもペレットのボイラーとチップのボイラーを２つ並べて、それで市庁舎の冷暖房は全部まかなっているそうです。なぜ燃やして冷房になるのかは本を読んでいいただければ、多少かいつまんで書いてございます。

市の施設だけでなくて町の中にも使おうということで、ハウスでトマト栽培をしている専業農家も、ペレットのボイラーで温度管理をやっています。その農家の方は、２つの意味で経営がとてもよくなったと言っています。もともと重油とか灯油のボイラーを使っていたのを変えたのですが、

ひとつには、そもそもお金がかからなくなったと言います。石油のボイラーを使い始めたのはもう何十年も前で、その頃は石油は安くて便利なものでしたが、最近は原油高騰という事態になり、当時30円くらいだったのが150円くらいになっているのです。そうするとペレットの方がずっと安くなり、エネルギー代が節約できているわけです。もうひとつ彼が言っているのは、石油は価格が乱高下して困るが、ペレットは価格が一定だということです。どういう事かというと、トマトは苗を植え付ける時にだいたいどれくらいコストがかかって売ったらどれくらい儲かるか、ということを計算するので、エネルギー代もその時の価格で、だいたいこんなもんだろうと思っていても、それが上がってしまえば、トマトを売っても全然儲けにならないということになってしまうわけです。実際に石油代が上がったのでハウスの温度を1℃下げたらトマトは全滅したそうです。そういう体験をしているので、価格がずっと一定というのはすごくありがたいことなのだと言っているわけですね。こういうグローバル資本主義というのは本当に価格決定権が手元にないのです。すごく遠くの、シカゴあたりにある市場で、原油の取引をやっている人たちの間で値段が決まって、それに我々が影響を受けるわけです。最近は穀物も常に上がったり下がったり、基本的にはずっと上がる方向にありますね。投資家はみんな儲けたいからどんどん上がって行ってもらった方がいいわけです。使っている人のことなんか全然気にしていないのです。ですから、その農家の方は、このペレットを使うことによって、和田さんと同じように、グローバル市場のエネルギーの奴隷から解放されたことになるのです。

それから真庭市は、元京都府副知事の太田さんが、出身地のために人生をかけたいと地元に戻ってきて、木の発電所を作っています。1つ目はほとんどできていると思いますが、もう1つ作るのです。皆で出資してこの発電所を2つ作って、まずは間伐材で始めています。真庭市は5万人いるのですが、その5万人分の電気が計算上自給できるようになっています。ですから、やればできないわけではないのです。

“なつかしい未来”というのをこのペレットの世界で実感して頂きたいのですが、これはオーストリアの話です。日本よりもずっと木のエネルギーの利用が進んでいまして、ある町では8割ぐらいを木のエネルギーでまかなっています。もともとはロシアからの天然ガスのパイプラインに依存していたのですが、ロシアという国は気に入らないとパイプラインを止めてしまうのです。しかも価格決定権はロシアの側にあるわけです。こちらの生活の都合と関係なく値上げされてしまうのは困る、ついでに言うと原子力もいやだと言って、作った原子力発電所を廃炉にしてしまいました。そういう経緯で木材をたくさん使うようになりました。

そこでは冬が本格化する前に製材所からペレットをタンクローリーに流し込んで、家々を回ります。家の地下にはペレットを入れるタンクがあって、そこにホースをつないでスイッチを入れるとザーッと出ます。ものの数分です。手も汚れない。もうひとつホースが付いていて、そちらはタンクの中の灰を吸い上げてくれます。灰の掃除もいらない。家ではひと冬分の暖房とお湯を全部そのペレットでまかなえる。木のエネルギーって手が汚れるし、その割

には寒いし、という感覚があると思うのですが、ここへ行くと全く木のエネルギーのイメージが変わります。電気のエアコンと一緒ですね。それを全てペレットでやれている。最先端の技術を使って昔をとりもどす、なつかしい未来の最先端だと思います。

そこへ行ってきたディレクターが、そのボイラーを開発している会社を取材したら、更に頼もしい話になっていたそうです。石油の技術開発というのは戦後何十年ずっとやり続けて頭打ちのところまで来ている。その間、木のエネルギーはずっと止まったままだったので、これから伸びる余地がいっぱいある。今の最先端の技術を使えば、木でもどんどん熱効率を上げることが出来て、石油と同じくらいまで、むしろ石油より高いくらいまでいける、というのです。日本では木のエネルギーは1パーセント以下ということですが、そういう話を聞くと日本人もやったほうがいいのになと思うわけです。

それから里山資本主義のもう一つの原理というか大事なことですが、そういう、地元にあるものを使ってエネルギーを起こすようにしていくと、外から買ってくる場合とは経済効果が全然違ってきます。ストーブの灯油をガソリンスタンドに買いに行って、例えば千円払うのと、近くの製材所に行ってペレット代千円払うのでは、千円札を出して払うということでは全く同じですが、ガソリンスタンドに払った千円のほとんどは地元には残らない。でもペレットだと、ほぼ１００％その製材所に残るわけです。そうすると製材所の人は「今日はペレットすごく売れたな」と言って、じゃ飲みに行くかというような話になって、その分町の中で使ってくれるわけです。

要するに、最初の話の、エネルギー代が全部外に行ってしまっているというのが、一番の問題なのです。この部分を解決できれば、地域でも生きられるのではないですか。食べていけるのではありませんか、ということなのです。食べ物も今はまだ残念ながら田舎の人でも、すべての食材をスーパーに買いに行っているというような方もいらっしゃいますが、近所のおばあちゃんが作っている野菜などを使うようになってくると、だんだん豊かさが増してくるのです。

だいぶ山岳会の話からは離れてしまっていますが、そういった気づきといいますか、ある種の頭の中の常識みたいなものを一回はずしてみて、登山道の周り、道沿いの田んぼや畑など、その両側に見えている風景がただの風景なのか、それともそういうことまで考えられる風景になるのかということによって、自分たちができることの範囲が大きくなっていくのだと思います。

（記録：元川　里美）

〈追悼〉

國見利夫さんを偲ぶ

松本　恒廣

自然保護委員会の元委員長國見利夫さんが去る9月13日亡くなられた。享年89才。私が1981年（昭和56年）に委員会に加わった翌年、中村純二理事の下で委員長に就任され、以後7年間はフィールドマナーノートの作成や日米環境会議での「登山家の立場から―山を中心とした自然保護」と題しての講演。南ア・スーパー林道修復停止、白神山地ブナ原生林の保全と広域基幹林道青秋線の建設計画中止、祖母・傾山系における原生林の保護と伐採計画の見直し、屋久島ロープウエイ計画等の環境破壊阻止に尽力された。

〝会議で考える自然保護ではなく皆で一緒に登って考える自然保護〟をモットーとされた。1976年（昭和51年）に委員になられた國見さんは1993年（平成5年）退任後、1995年9月に新たに発足した同好会、緑爽会の代表として地球温暖化や湿原保護の勉強会を開くなど会の基礎固めに努められた。1993年9月に創刊された委員会機関誌『木の目草の芽』では、元副会長であり、かつて委員として活躍された織内信彦さんとの対談（17・18号）は、我々にとっては示唆に富むものであった。緑爽会報には2008年（平成20年）1月から「山脈・人脈・思い出の人」と題して連続6回にわたり前述の織内氏の他に大木操、渡辺公平、大石武一、村井米子、渡辺正臣氏等の横顔を綴ってくださった。直に接しられた先輩諸氏の、今となっては貴重な記録となった。

1925年（大正13年）、小田原で出生。初めての山は父親に連れられて登った大山。続いて丹沢。我々もよく昔歌った〝丹沢小唄〟にある、オンボロシャツに使い古しの歯のすりへった赤い鼻緒の女物の下駄はいて、肩に12ミリの太い麻ザイルのスタイルで得意になって歩いていたと云う。1944年（昭和19年）明大へ進学、即山岳部へ入部したつもりが戦中のどさくさで山どころではなく、やがて陸軍幹部候補生、半人前の軍人のうちに終戦。1950年、登山活動再開、谷川岳の岩壁で主に活躍。JACには1961年（昭和36年）2月入会（№5228）永年会員。1973年（昭和48年）都山岳連盟常務理事、1989年（平成元年）日本山岳協会常務理事等を歴任。後年、これらの貢献に対し日本オリンピック委員会委員長、日本体育協会会長連名での表彰状を受けられた。

職場は衆議院事務局。ここでのエピソード。1961年に衆議院山岳会が出来た時、さっそく入会申込みをしたところ、「そのお年で大丈夫ですか」と云われた。当時、36才。中高年登山ブームの前だったが老人扱いだったと云うことで今では考えられない話だ。勿論入会OK、翌年さっそく会長に。以後20年間会長を務めた。事務局では司法・地方行政等の立法事務を担当され、その功により受勲された。ご葬儀当日のご遺体横に置かれた遺影には勲四等旭日小綬章を胸にした、いつもの温厚なお顔の國見さんがあった。

合　掌

（自然保護協力委員）

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈十月度〉

①山岳団体自然環境連絡会：10月17日（金）

出席者；渡邉、富澤

●環境省との意見交換

・トレイルランニングの指針について

・「地域自然資産区域における自然環境の保全及び持続可能な利用の推進に関する法律」について

●各団体の報告

②その他報告

●労山「全国登山者自然保護集会」：10月11日・12日　出席者：近藤

・リニア中央新幹線をテーマとした静岡大学　和田秀樹教授の講演内容に関する報告が行われた。

●東海支部の議事録に基づき活動内容に関する報告があった。

③自然保護委員会　10月22日（水）

●自然保護全国集会（広島）について

・プログラムの変更点について

・参加申し込み状況について

●『木の目草の芽』について

・次号は全国集会報告号とする。

※『木の目草の芽』112号発行

〈十一月度〉

①山岳団体自然環境連絡会：11月6日（木）

出席者；渡邉、富澤

●広島山岳平和祭の打ち合わせ

●各団体の報告

●HAT-Jの住所、代表変更の報告

②自然保護全国集会を広島で開催　11月22日（土）

③自然保護委員会　12月1日（月）

●自然保護全国集会（広島）について

・担当委員より会計報告が行われ、承認された。

・全国集会の総括が行われ、左記の3点が検討された。

(イ)時間が少なく十分な討議ができなかった宮崎支部と静岡支部の報告については、『山』への掲載を検討する。

(ロ)報告が割愛された「トレイルランニング」、「地域自然資産区域における自然環境の保全及び持続可能な利用の推進に関する法律」については、『木の目草の芽』に掲載するとともに、会員向けの勉強会の開催を検討する。

(ハ)基調講演をDVDなどのメディアで各支部に配付する事を検討する。

●『木の目草の芽』について

・113号の執筆担当者およびテープ起こし担当者を決定した。

・114号の執筆担当者およびテープ起こし担当者を決定した。

・115号の目次を検討した。

〈編集後記〉 広島全国集会の報告を2回に分けて掲載いたします。今回、出席できなかった私もICレコーダーの録音を聞かせていただき、遅ればせながら当日の熱気を感じ取ることができました。

そんな会場の雰囲気を紙面上でもできるだけ再現できるように努め、記憶の新鮮なうちに皆様のお手元へお届けするつもりでしたが、年の瀬を迎えていたこともありまして、**12月号の発送が遅れてしまいましたことを、お詫び申し上げます。**

次号（新年号：1月末発行予定）では、支部報告（追加分）と弥山ハイキング報告を掲載予定です。　（元川）